

筑スポ

女子駅伝

杜の都激走

来年度シード権獲得

堂々3位

10月28日に仙台市で行われた第30回全日本大学女子駅伝対校選手権大会において、9年ぶりに本選に出場した筑波大が見事に3位入賞を果たした。今回の結果について、駅伝チームの主宰である上野泰加選手(人文3年、神奈川・横須賀高)が、「目標が6位以内だったのでこの結果は自信にもなったし、喜びも大きかった」と話すように、この結果はチームにとって大きな収穫となった。

美しい杜の都・仙台を舞台に、全長38.6kmのコース、全6区間で争われるこの大会。筑波大は6区間のうち4区間に1年生を起用する若いオーダーで挑んだ。午後12時10分、号砲と共に28人の女子大生ランナーが仙台市陸上競技場をスタートし、仙台の街並みへと駆け出していった。重要なスタートの1区を任されたのは、関東予選と同じく大森由香子選手(体育2年、兵庫・姫路西高)。上野選手も「前半のいい流れを作ってくれた」と話すように、落ち着いた粘りのある走りを見せて先頭と26秒差の11位で襷をつないだ。

2区は関東予選で区間賞を獲得している久馬萌選手(体育1年、京都・綾部高)が快走を見せた。襷を受けると、1km地点で早くも6人を抜く圧巻のスピードでさらに前を目指す。久馬萌選手は最終的には5位にまで順位を上げ、双子の姉である久馬悠選手(体育1年、京都・綾部高)に襷を渡す。

3区は「華の3区」とも呼ばれる、全区間の中で最も距離が長い9.1km。各大学のエース級のランナーが集まる中で、日本インカレ10000mの王者である久馬悠選手が貫禄の走りを見せた。襷を受け取ってからすぐに4位の城西大学を捉え、追撃を始める。久馬悠選手は力強い腕の振り、足の運びの走りで強豪の京都産業大学の選手も抜き去り、区間賞まであと5秒という区間2位の走りを見せてチームを3位まで押し上げた。

4区を走ったのは羽田智香選手(体育1年、栃木・真岡女子高)。羽田選手はしなやかな走り、他大学の追い上げを許さず、順位を保ったままレースは終盤に突入していく。

5区は最大標高差46m、3つの坂を駆け上るアップダウンの激しいコースの名物区間。攻略が最も難しいこの区間に新山美帆選手(体育1年、山口・徳山高)が挑んだ。雨が降り出す肌寒い気候の中、新山選手は懸命に前にいる2校を追って険しい坂道を走り、最終区へと襷を繋いだ。

アンカー区間である6区を走るのは主将の上野選手。6区はさらに雨足が強まる過酷なコンディションとなった。上野選手は「前半を抑え過ぎてしまつて、目標としていたタイムよりも遅かった。

そのため個人としては悔しい部分や反省する部分が多い」と自分の走りを振り返ったが、区間4位の見事な走り、順位を守り切り、3位でゴールテープを切った。6人全員がしっかりと走つて襷を繋ぎ、2時間7分41秒という総合タイムを残した。

9年ぶりの出場ながら例年上位を占める関西の強豪校と互角に渡り合った筑波。駅伝を筆頭とする今季の長距離ブロックの顕著な活躍について、上野選手が「二人一人がしっかりと自覚を持って練習に取り組むことができた。また、誰かが良い記録を出したら自分もと、お互いに刺激し合えたのが良かった」と話すように、競争意識が高まったことが好成績に繋がった。

目標を大きく上回る3位入賞という結果。しかし、選手たちはさらなる高みを目指している。「来年は関東大会でも全国大会でも優勝したい。走る選手全員が区間賞を獲得くらいに気持ちでやっていたい」と力強く、来年の駅伝への抱負を語ってくれた上野選手。今回走った選手は全員が3年生以下ということもあり、同じメンバーが来年もそのまま残る。来年はユニチャール杯のユニフォームが、栄光のゴールテープを切る瞬間が見られることを期待したい。

(中矢圭)

写真提供 陸上競技部

筑波スポーツ

平成24年12月17日(月) 第151号

題字:中山雅史氏
(元サッカー日本代表・蹴球部OB)

スポーツの秋

熱戦を繰り広げた秋季リーグ特集!!

準硬式野球部

9月4日～10月5日にかけて行われた秋季3部リーグ優勝した準硬式野球部は、10月31日・11月1日に行われた2部・3部入れ替え戦で日本体育大学以下、日体大と対戦した。入れ替え戦について、主将である中原俊樹選手は「主将である中原俊樹選手は、副主将の磨伊慶明選手(体育2年、富山・砺波高)、篠田洗樹(人文2年、神奈川・木更津高)とお話を伺った。入れ替え戦1戦目は1、2回裏で2点先取するも、3回裏に追いつかれ、6回裏には逆転されてしまい、厳しい展開となった。しかし、8回裏で一気に2点を返し、そのまま9回裏に逆転、サヨナラ勝ちで、1勝をもちとった。

2試合目は1、2回表に順調に2点先取。日体大に1点追加されるも、その後も追従を許さず、8回表に1点を加え、日体大に勝利。2部リーグ昇格を果たした。このことについて聞いた。

(中原選手)「春季リーグはあまりうまくいかなかった。その悔しさをバネに秋季リーグは『全勝』を目標に戦ってきた。春季リーグでは不利な展開になるも、そのまま持ち直すことが出来なかったが、今回はそのような状態でもチームの雰囲気良く、負ける気がしなかった。また、3年生最後の試合だったので、2部昇格した嬉しさ

大変ではあるが、そこがこの部活の魅力でもある。自分たちで考え、目標を定めてやっていくことにやりがいを持って取り組んでいるように思われる。最後に今後の抱負についてお聞きした。

(磨伊選手)「秋季リーグは3年生の力が大きかった。点が欲しい展開になると3年生が点を取ってくれた。代替わり後は自分たちがそうなるようになりたい。」

(篠田選手)「チーム全体としては1部昇格。個人的には新主将として、下から頼られるような先輩になつて、チームを引っ張ってきたい。」

(篠田選手)「3年生がチームを2部へと昇格してくれた。その責任を背負っていかなくてはならない。様々な学生が集まり、自分たちで運営している準硬式野球部。新体制となった準硬式野球部のこれからに目が離せない。」

(小峰朱理葉)「東女体に勝つた実力があつたのだから、優勝できる力はあつたはず。東女体との最終戦では自分たちらしいゲームが出来たので。」

個人賞を獲得した両選手。まず優秀新人賞を獲得した加納選手は「嬉しいうというより驚きのほうが大きかった」と当時の心境を明かす。この大会でただ一人贈られる優秀新人賞について尋ねると、「自分にはもったいないくらいの名譽。これから更に頑張っていかなければ、という気持ちになった」と力こもった言葉で答えた。

川俣選手は優秀選手賞を獲得したが、「受賞は嬉しいけれどチームは優勝できなかった。個人賞よりもチームが優勝したほうがもっと嬉しかった」と再び悔しさをにじませた。チームを引っ張る主将として、チームを優勝に導くことが出来なかった責任を感じているようだった。

この年間主将としてチームを引っ張ってきた川俣選手。主将としての反省や感想を伺った。「春に優勝できたことは良かった。しかし全国の大

女子ハンドボール部

9月に関東学生ハンドボール連盟・女子秋季リーグが開催され、筑波大は2部リーグで五勝一敗の結果で3位となり優勝した春季リーグに続く、春秋連覇はならなかった。一方で優秀選手賞に川俣かり選手(体育4年、鹿児島・蒲生高)が、優秀新人賞には加納明帆選手(体育2年、秋田・大曲農業高)が選出された。両選手に改めて今回の大会を振り返って聞いた。

「優勝を狙っていたので満足いく結果ではない。この大会を最後に引退した川俣選手はまず悔しさを口にしました。『今回優勝した東京女子体育大学以下東女体には勝つたが、負けた試合がとても悔しかった。』

続いて加納選手も同じように悔しさと共に結果を振り返った。

「東女体に勝つた実力があつたのだから、優勝できる力はあつたはず。東女体との最終戦では自分たちらしいゲームが出来たので。」

個人賞を獲得した両選手。まず優秀新人賞を獲得した加納選手は「嬉しいうというより驚きのほうが大きかった」と当時の心境を明かす。この大会でただ一人贈られる優秀新人賞について尋ねると、「自分にはもったいないくらいの名譽。これから更に頑張っていかなければ、という気持ちになった」と力こもった言葉で答えた。

川俣選手は優秀選手賞を獲得したが、「受賞は嬉しいけれどチームは優勝できなかった。個人賞よりもチームが優勝したほうがもっと嬉しかった」と再び悔しさをにじませた。チームを引っ張る主将として、チームを優勝に導くことが出来なかった責任を感じているようだった。

この年間主将としてチームを引っ張ってきた川俣選手。主将としての反省や感想を伺った。「春に優勝できたことは良かった。しかし全国の大

男子バレーボール部

リーグ準優勝



敢闘選手賞：久原選手

スパイク賞：田城選手

ベストスコアラー賞：出未田選手

えが上手にできていて、私生活はともかく練習での集中力はすごい。」

久原選手「(田城選手は)皆から愛されるキョウキョウ。日常生活でもブレイクスタイルでも人をイラつかせることが得意だが笑、身体能力は高く足が太い。人一倍の努力もしている。秋季リーグで開花した選手。唐突な質問だったにも関わらず素直に答えて下さり、同期三人の仲の良さが伝わってきた。

いよいよ本題に入り、秋季リーグを終えての感想を伺った。「リーグもインカレも優勝するために取り組んでいるが、もう少しのところで逃してしまっている。悔しい結果だったが、課題が明確になり、いい収穫だったと田城選手。出未田選手は「春季リーグは他チームの結果を待っての2位だったが、今回は優勝争いに加わることができた。2位。春よりは進歩していると思う。チームとしてのまとまりもでき、いい秋になった」と振り返った。

久原選手は「最近の大会は2位、3位で終わってしまっているが、やるからには1位になりたい。悔しい課題が見つかり、これからの毎日が勝負だと思っている」と語った。

春・秋共に1部リーグで2位という好成績だが、満足なできていない。最後に今後、個人で果たしたいと思う役割と、チームの目標をうかがった。

田城選手「自分はミドルブロッカーなので前衛の3ローテーションしかコートにいない。コート外にいても中にもチームの士気を高め、いい影響を与えられるようにしたい。」

出未田選手は「点を取るものが大事。きつい状況でもどんなときでも点を取りにきたい」と述べた。

久原選手「守備と繋ぎが仕事。それ以上に全日本インカレでは攻撃面で貢献したい。コートの中での選手の仲介役になればと思う。コミュニケーションをとり、勝ちに繋げたい。」

チーム目標はもちろん、12月3日から神奈川県(川崎市)とどろきアリーナで行われる全日本インカレで優勝することだ。最後に、大会前の忙しい期間にもかかわらず取材に応じて下さった部員の皆さんにも感謝した。

(武藤菜摘)



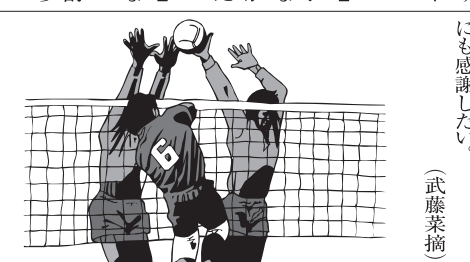
二部リーグ昇格

学が相手になるインカレで結果を残すことが大事だと思う。後輩には年を通じて勝ち続けられるチームを目指してほしい。」



まず田城選手による出未田選手の紹介。「同じ北海道出身で中学生のときから対戦しているが、全日本に頻繁に招集されていると思う。勉強にも練習にも真面目に取り組んでいる。部活の場でも全日本の場でも、今後の活躍に期待している。」

出未田選手「(久原選手は)ムードメーカー。リーダーシップがあるし、チームを引っ張る存在。オンとオフの切り替



蹴球部

アメリカンフットボール部

結果一覧

【硬式野球】
○筑波大学野球秋季リーグ戦
○筑波大 4、3 ●大東文化大
総合結果 9 勝 5 敗

【バドミントン】
○全日本学生バドミントン選手権大会
男子団体戦
1 回戦 ○筑波大 3、0 ●九州実業大
2 回戦 ○筑波大 0、3 ●早稲田大
総合結果 ベスト 16
女子団体戦
1 回戦 ○筑波大 3、0 ●愛媛大
2 回戦 ○筑波大 3、0 ●同志社大
3 回戦 ○筑波大 1、3 ●日本体育大
総合結果 ベスト 8

【漕艇】
○全日本新人選手権大会(漕艇)
男子シングルスカル決勝 B
第 1 位 越智寛太(体育工)
○東日本新人選手権大会(漕艇)
女子ダブルスカル決勝 B
第 1 位 市川沙矢香(資源工)

【男子バスケットボール】
○関東大学バスケットボールリーグ戦
○筑波大 81、94 ●青山学院大
○筑波大 76、67 ●日本体育大
○筑波大 74、64 ●専修大
○筑波大 83、78 ●早稲田大
総合結果 第 4 位
○全日本大学バスケットボール選手権大会
1 回戦 ○筑波大 55、49 ●関西学院大
2 回戦 ○筑波大 78、68 ●日本体育大
準々決勝 ○筑波大 59、60 ●近畿大
5 位 8 位決定戦 ○筑波大 83、63 ●日本大
5 位 8 位決定戦 ○筑波大 91、89 ●専修大
総合結果 第 5 位

【女子バスケットボール】
○関東大学バスケットボールリーグ戦
○筑波大 80、73 ●松蔭大
○筑波大 73、76 ●松蔭大
1 回戦 ○筑波大 72、54 ●立命館大
2 回戦 ○筑波大 55、51 ●東北学院大
準々決勝 ○筑波大 87、75 ●白鷗大
準決勝 ○筑波大 54、65 ●大阪体育大
3 位決定戦 ○筑波大 74、82 ●拓殖大
総合結果 第 4 位

【陸上競技】
○全日本大学女子駅伝対校選手権大会
第 3 位
○全日本大学女子駅伝対校選手権大会
来年度大会シード獲得(9 年ぶり)
【男子サッカー】
○関東大学サッカーリーグ戦
○筑波大 2、1 ●東京学芸大
○筑波大 4、1 ●明治大
○筑波大 1、2 ●早稲田大
○筑波大 1、3 ●専修大

【女子アイスホッケー】
○全日本学生アイスホッケー選手権大会
1 回戦 ○筑波大 3、0 ●北海道教育大
2 回戦 ○筑波大 1、2 ●長崎大

【男子ハンドボール】
○全日本学生ハンドボール選手権大会
1 回戦 ○筑波大 34、25 ●関西学院大
2 回戦 ○筑波大 16、25 ●日本体育大
総合結果 ベスト 16

【女子ハンドボール】
○全日本学生ハンドボール選手権大会
1 回戦 ○筑波大 25、16 ●武蔵野大
2 回戦 ○筑波大 22、31 ●大阪教育大
総合結果 ベスト 8

【柔道】
○全日本学生柔道団体別団体優勝大会
2 回戦 ○筑波大 ●大東文化大
3 回戦 ○筑波大 ●国士館大
準々決勝 ○筑波大 ●国士館大
準決勝 ○筑波大 ●国士館大
決勝 ○筑波大 ●国士館大
総合結果 準優勝
○全日本学生柔道団体別団体優勝大会
1 回戦 ○筑波大 ●天理大
2 回戦 ○筑波大 ●東海大
総合結果 2 回戦進出
○全日本学生柔道団体別団体優勝大会
男子 73 kg 級 第 3 位
西山雄希 優勝
男子 66 kg 級 優勝
森下純平
女子 78 kg 級 第 2 位
緒方亜香里



猛攻届かず...

第 86 回関東大学サッカーリーグ戦で筑波大学は 6 位に沈んだ。この結果を受け、12 月から行われるインカレに出場できないことが決まった。リーグ得点王の赤崎秀平選手(体育 3 年、佐賀・佐賀東高)や、アシストランキング 2 位の上村岬選手(体育 3 年、静岡・磐田東高)を擁した筑波だが、主力選手の怪我や離脱に泣いた。

4 月に前監督の風間八宏氏が 1 チームの監督に就任して筑波を離れ、夏には主力選手の 1 人がプロ契約し、退部。瀬沼優司選手(体育 4 年、神奈川・桐光学園高)も、1 での試合に出場しながら筑波の試合に臨むこととなる。チーム内に混乱した感はあるが、そんな状況下、11 月 10 日の首位専修大学との試合に敗



インカレ出場のがす

11 月 18 日、関東学生アメリカンフットボール連盟秋季リーグ最終戦が東京都調布市のアミノバイタルフィールドで行われ、筑波大学 Excelsus は東京農工大学を相手に 23、21 で勝利した。これで五勝敗の最終成績で三部リーグ C フロアにおいて 3 位となり、惜しくも一部昇格を逃した。

筑波の試合前、10 月に筑波を破り、リーグ首位を走る国際基督教大学の試合が同会場で行われ、高千穂大学相手に勝利。この瞬間、筑波の優勝、つまり一部昇格への道は閉ざされた。その瞬間を目の当たりにしながら選手たちは気持ちを切り替えてリーグ最終戦へ臨んだ。

試合は序盤、筑波が攻撃の主導権を握る。東京農工大のフールもありチャンスを作り、筑波が先制。筑波が効果的に得点を重ね 1 Q は 10、0 で終了する。しかし 2 Q では守備



ではランプレイを決められ陣地を大きく失い、攻撃ではなかなか敵陣に進めない。2 Q 終了時点で 17、6 と点差は広がったものの、この試合初の失点を許してしまった。

ハーフタイムを挟んだ後半は筑波にあって我慢の時間帯が続く。3 Q は両チームとも決め手を欠き、無得点に終わる。4 Q は筑波のパスミスから東京農工大に攻撃権を奪われるなど主導権を握られかける。東京農工大はタッチダウンなどで得点を重ね、一時は 21、20 と勝ち越される。必死の援手が飛ぶ。残り時間あと僅かというところで筑波はゴール前で進出。ゴールのキックを決めれば勝ち、決められなければ負けというゼロか百かの状況となった。

この土壇場において 17 番の鈴木駿選手(体育 4 年、神奈川・希望ヶ丘高)が見事にキックを決め 3 点を獲得。23、21 と土壇場で逆転しそのまま試合終了となった。薄氷の勝利でなんとか筑波が最終戦をものにしたら、この試合の結果にあわせて三部リーグ C フロアの優勝は国際基督教大学となった。残念ながら筑波は今年度の三部リーグへの昇格を逃した。これで 4 年生の選手は引退となり、後輩たちが先輩からチームを引き継ぎ、来年以降けた来年の秋季リーグまである。時間はまだまだある。その間に、今年よりも強いチームへと進化し、来年こそ朗報が聞けることを期待したい。(湯地達)

Off Season特集

みんな、オフってなにしてるの??

今号から始まったOff Season特集。初回はライフセービング部です。

ライフセービング部

ライフセービング部は主に海やプールを活動拠点として、彼らの活動の大きな特徴は、単に運動能力・競技力を身につけるだけでなく、海水浴場でのパトロールや要救助者を救助する力も必要とされていることである。もちろん、泳ぐ速さや浜辺での運動能力を競う競技もある。しかしその競技も単純な泳力や走力を競うものではなく、要救助者を見立てるなど救助活動が重視されている。

現在、季節的に彼らの活動は段落という時期である。オフシーズンの練習を見よう、屋内プールに足を運んだ。そこではライフセービング部ならではのマネキンと救助用チューブを使った練習が行われている。

マネキンは潮者に見立てて使われるので、水を入れた約 45 kg にもなる。冬場に行われる屋内プールでの競技会では、このマネキンを水深 2 m から引き上げ、泳いで運ぶ速さを競う種目があるとのこと。だが 45 kg のマネキンをプールの底から引き上げるのも、運んで泳ぐのも至難の業だ。

そしてチューブを使った救助の練習も見せてくれた。チューブとは牽引ロープの付いた細長い浮きのようなもので、それを潮者の脇の下にくぐらせて浮き輪状にして使う。海水浴場のパトロールでも用いられており、ライフセーバーの必須道具である。救助の心構えとして鶴岡宏海さんが挙げたのが「安全・確実・迅速」の 3 点。時には人命を預かるライフセーバーならではの言葉である。

現在はオフシーズンだが、彼らの活動は夏場とほとんど変わらない。プールでの練習、ランニング、ウェイト、そして毎週末には海で練習。「ライフセービングは自然を相手にしなくてはならない。特に冬は海は本当に厳しい」と浅岡紘季さん(資源 3 年、愛知・刈谷北高)は語る。冬は海は寒さだけでなく、波も高いため、その厳しい環境で練習してこそ鍛えられるという。

またの他に「大竹海岸でのクラブの活動や、つくばマラソンの救護係など、オフにもたくさん活動がある」と明かしてくれたのは赤田樹皇さん(情報 2 年、愛媛・松山東大)。さらに、冬場は次の夏に向けた準備の期間と合わせ、海岸パトロールの打ち合わせ、応急救護の復習、小型船舶の免許取得などもこなす。

「オフシーズン」特集として紹介したが、どうやら彼らは「オフ」など存在しないらしい。(大庭夏海)

ラグビー部 創部 89 年

初 V

王者帝京
粉砕

筑波大学ラグビー部が創部 89 年目にして初の快挙を成し遂げた。12 月 1 日に行われた今シーズン最後の関東大学対抗戦で帝京大学に勝利し、帝京大、明治大とともに同校優勝に輝いた。

この日、筑波大史上初の優勝を見届けようとしたスタンドにはたくさんのファンが足を運んでいた。この戦いに勝利すれば帝京大との同時優勝の可能性が残っていた。対する帝京大は今シーズンこれまで無敗で、最終戦を迎える前にすでに優勝を決めていた。筑波大も 10 月の明治大学戦に敗れた以外は負けなしでここまできていた。しかも、直近 2 試合(青山学院大戦、日本体育大戦)はともに相手にトライをひとつも許さない完勝で、勢いに乗っていた。

この日も試合開始から攻め続け、敵陣でのプレイがしばらく続いた。しかし小さなミスから大きく陣地を戻され開始 13 分で先制トライを奪われ

てしまった。このまま帝京大のペースでいくかと思いきや、この日の筑波大はやはり意気込みが違った。先制トライを奪われた直後の 16 分、今度は筑波大がボールを奪い敵陣ライン際まで陣地を進め入った。帝京大の執拗なタックルをかわり、山崎一選手(体育 2 年、長崎北高)がトライを奪い、続いて松本真七郎選手(体育 2 年、福岡高)が難しい角度からのゴールを確実に決め、早くも同点に追いついた。

昨年度の学生選手権での対戦の際、筑波大は帝京大の圧倒的なパワーに押され、力負けしてしまっただけに見えた。実際、フォワードの平均体重の差は 7 kg 以上あった。スクラムも必ずしも押し下がり、決してトライはさせなかった。そして、30 分にはとうとう相手のモールを粉砕した。

その筑波大の粘り強いディフェンスはロスタイムまで続いた。執拗なタックルで帝京大のミス誘いを、決して自陣には踏み込ませない。そしてノーサイドの笛がグラウンド、スタンドは歓喜に満ちあふれた。24・10。後半、帝京大にひとつもトライを許さず勝ちきった。この瞬間、筑波大学ラグビー部 89 年の歴史に優勝という大きな一ページが刻まれた。

翌日行われた早稲田大学と明治大学の試合では、明治大が勝利し、筑波大、帝京大と勝率で並び(6 勝 1 敗)、3 校の同時優勝となった。さらに筑波大は得失点差で関東対抗戦 1 位となり、次のステージである学生選手権に駒を進めた。ここからはいよいよ本に向けての戦いが始まる。昨年、準決勝で敗退した雪辱を晴らす冬にしたい。

(大庭夏海)

訂正とお詫び

この度は 150 号におきまして、一部誤りがありました。謹んでお詫び申し上げます。また左記の通り訂正をお願いいたします。

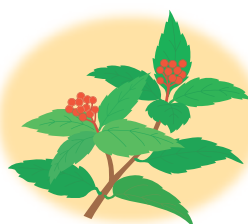
2 面
カヌークラブインカレ
誤)インカレ優勝
正)インカレ準優勝

編集後記

早いもので今年も師走となりました。12 月といえば就活のスタートですが、私は秩父宮ラグビー場で大声援を送っていました。いやあ、熱かったです。いよいよ凍えるように寒かったです。しかし凍えた甲斐あつてか、初優勝の場面に立ち会えることができ、一生思い出に残る 12 月のスタートになりました。

そして、12 月は代替わりの時期でもあります。編集部も次号からは新幹部が中心となって運営します。3 年生が抜けると、とたんに人数が減ってしまう。正直「この先どうなるかな」という状態です。読者の皆様には温かく見守っていただきますよう、よろしくお願ひします。今号は私が編集長として発行する最後の筑波スポーツとなりました。皆様楽しんでいただければ幸いです。1 年間、ありがとうございました。

編集長 大庭夏海(人文 3 年)
主務 矢野芽佳(人文 3 年)
広報 遼人(文 3 年)
湯地 遼人(文 3 年)
会計 三浦加奈(文 2 年)
編集スタッフ
小峰朱理(人文 2 年)
中矢 圭(知識 1 年)
武藤菜摘(文 1 年)



発行所/筑波大学体育会
(TEL.029-853-2589)
発行人/深山 大生
編集/筑波スポーツ編集部
tsukusupo@hotmail.co.jp
責任者/大庭 夏海(編集長)